

いわき市教育委員会  
研修だより

いしずえ  
礎

研修だより 第21号  
令和3年3月8日

発行所  
いわき市教育委員会  
発行責任者  
教育長 吉田 尚



## 「意義を見出すこと、 意図を持つこと」

いわき市教育委員会学校教育推進室

学校教育課長 鯨 岡 寛 泰

授業でも学校行事でも、外部講師などを招いて学ぶ時間でも、教育活動には「意義」と「意図」が大切だと思います。

それまでの学びはどうだったのか、「その時間」は、子どもたちに何をもたらすのか、子どもたちの生き方にどう影響し、将来にどうつながるのかなどについて、子どもたちの成長との関連からどういう「意義」を持つのかを確かめることが必要ではないかということです。そして、その意義を踏まえ「その時間」を、どの時期に、何時間の見通しで設定するのか、また「その時間」で、何を学ばせ身につけさせたいのか、さらには教えるのか、考えさせるのか、支援するのか、導くのか、待つのか、準備するのか等々「意図」を持って「その時間」を組み立てることが必要ではないかということです。

世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症は、昨年度末以来、学校へも大きな影響を与えてきました。長期にわたる臨時休業を経験し、また、教育活動は、校内外における感染予防対策に最大限配慮したうえで進められ、教職員は、日常的に感染対策と教育活動との両立に力を注いできました。

今年度の教育活動が“これまで通り”とはいえない状況の中であっても、進めてくることができたのは、“これまで”と“現状”との比較から、“できない”と立ち止まるのではなく、今の状況であってもできることや代わりになることに「意義」を見出し、また、例えば、何を残して、何を

削るか、参加対象や場所、時間設定をどうしたらよいか、アプローチをどうするかなど、“これまで”を再検討し、「意図」を持って各学校で取り組んできたことの賜であると思います。

新型コロナウイルス感染症の拡大による GIGA スクール構想の加速化により、市教育委員会では、現在、ICT 環境の整備を進めています。既に各校に配備し活用が図られている大型提示装置を始めとして、Web カメラとマイク、児童生徒一人一台のタブレット端末の配置など、市内全ての小中学校において、同様の ICT 環境が整うことになります。

子どもたち一人ひとりがタブレットを持つ、大型提示装置や学習ソフトを活用する～ICT を活用する授業のイメージを、今から持っておく必要があります。新たに授業を構築するか、積み重ねてきた授業の中で活用できる場面を探るか、それとも単元の中で柔軟に双方を取り入れるかなどは、学校や児童生徒の実態、教科の特性、単元構築についての考え方などによるものではありませんが、市教育委員会では、実践事例集の配布や研修などによりサポートしていきたいと考えています。

「このことを子どもたちに学ばせたい、体験させたい、喜ばせたい…」は、教職員全てに共通する思いです。ICT 導入に当たって、まずは使ってみる、そして ICT を導入する意義を明確に捉え、子どもたちの学びの深まりを目指して、意図を持って活用を進めていければと思います。

## 視点 A Activity 様々な体験活動・学習支援活動の推進①

「経験者研修Ⅱ」社会体験研修に参加して  
いわき市立高久小学校 北郷 真由美

社会体験研修では、児童発達支援事業所「わくわくキッズ」で2日間の研修をさせていただきました。どの子どもも、それぞれの学習に集中し、自立して取り組む姿が印象的でした。子どもたちの安定した行動を支えているのは、学習ごとに仕切られた環境整備と、一人一人の発達課題に応じた学習内容を適切に支援する先生方の細やかな関わりであると感じました。

環境整備では、それぞれの場所や場面ごとに何をすればよいのか視覚的に理解しやすくなるようレイアウトされていました。理解を助ける視覚的な支援を生かすことにより、安心して学べる環境づくりができるのだということが分かりました。

学習内容としては、勉強や遊び、運動、おやつなど様々な学習活動がスケジュールとして組まれていました。先生方は、強制するのではなく、子どもが「やってみようかな。」という気持ちになるまでゆったりと待ち、できたときに褒めることを大切にされていました。また、自分から助けを求めさせる仕掛けもありました。「絵合わせ」の学習では、予め1枚の絵を抜いてあります。学習に入る直前に先生から「困ったことがあったら、言ってね。」と、子どもに伝えていました。カードが1枚足りないことに気付いた子どもは、「手伝ってカード」を見せ、隠してあった絵を受け取ることができました。この仕掛けの意図は、「困っていることを自分から伝えられるように」するためであるそうです。ねらいを達成するための手立てが明確に設定され、言葉かけが精選されていることで、効果的な学習を行うことができます。こうした学習の積み重ねにより、子どもの気持ちが安定し、できることが増えていくのだと思います。

通常学級にも、特別な支援が必要な子どもたちがいます。一斉指導の中でも、一人一人に対し、適切な支援をしていかなければなりません。今後、特別支援教育について積極的に学び、どの子どもも安心して学べる学級経営を目指していきたいと思います。

### キャリア教育実践講座から

#### 1 趣旨と実際

新学習指導要領では、小・中学校で「キャリア教育の充実を図ること」と示されており、本講座は、各学校でその実践に向けて理解を深め、キャリア教育の推進を図ることを目的として実施しております。

まず、概論の講義でキャリア教育の全体像をつかんだ後、昨年度キャリア教育優良校、文部科学大臣表彰の泉北小学校に、キャリア教育の基礎的・汎用的能力と教育活動を関連させた実践を紹介していただきました。また、継続してキャリア教育に取り組んでいる棚倉町教育委員会からは、小中の連携した系統的・継続的なキャリア教育の実践を紹介していただきました。

続く講義では、文部科学省の長田徹先生をお招きし、新学習指導要領のポイントと特別活動を中心としたキャリア教育の進め方について、ロールプレイをふんだんに交えながら、具体的にお話いただきました。最後に、自校の教育活動を基礎的・汎用的能力の視点でつなぎ、キャリア教育全体計画を作成する演習を実施し、研修のまとめを行いました。

#### 2 受講者の感想から

受講者からは、「キャリア教育の概論から実践、長田先生の講義まで幅広く学べた有意義な研修だった」「これまで漠然と捉えていたキャリア教育であったが、基礎的・汎用的能力と教育活動のつながりが整理できた」「参考になる事例がたくさんあり、自校での実践に生かしたい」などの意欲的な感想をいただきました。

#### 3 研修成果及び今後の取組み

教育活動全体を通じた組織的・系統的なキャリア教育の充実は、本市キャリア教育の重点の一つでもあります。キャリア教育の推進には、特別活動を要とし、教育活動をつなぐ視点が大切です。今後は、「いわきっ子チャレンジノート」等のキャリア・パスポートの活用も含め、学校全体でキャリア教育の捉え方を見直し、キャリア教育が子ども達の社会への架け橋となるよう実践を進めていきたいと思っています。

## 視点 A Activity 様々な体験活動・学習支援活動の推進②

### 「English Immersion Camp」から

「異なる国の人々とのコミュニケーション活動を通して、多様な考え方や文化に触れ、国際社会の一員としてお互いを理解することの大切さに気づかせる」「英語が日常的に使われている環境（イマージョン）の中で、英語によるコミュニケーションの成功体験を持たせる」「自信を持って未知のことに積極的に挑戦しようとする気持ちや、さらに高い目標に向かって努力しようとする意欲を高める」という目的のもと、中学校2・3年生を対象にした「English Immersion Camp」を実施しました。

ALT15名が、3つのワークショップを企画運営し、中学生は All English で過ごす半日となりました。ワークショップⅠでは、トップタレントを目指し、グループでアイデアを出し合いながら、即興の演技に挑戦しました。ワークショップⅡでは、会社の社員としてグループで協力してプレゼンテーションを行い、会社を売り込むという場面に挑戦しました。これは、まさに、学習指導要領外国語科の目標にある「コミュニケーションを行う目的や場面・状況に応じて英語を使う力」を身に付ける活動そのものでした。ワークショップⅢでは、キャラクターに変装した ALT に英語で質問しながらメダルを集めるという活動を満喫していました。思考力を働かせ、グループの仲間や ALT とコミュニケーションを図りながら、英語を使っている生徒たちは、活動を重ねるたびに、自信に満ちあふれていくのが分かりました。

机上の英語学習だけではなく、実際に英語を使う場面を体験することで、より深い学びにつながるのではないのでしょうか。生徒には、この体験を、これからの学校生活や英語学習に役立ててほしいと思います。



### ファイナンス・パーク(簡易版)の活動から

個人のお金に関する意思決定と将来の進路選択を主たるテーマとするファイナンス・パーク。

「生徒の活動へのモチベーションが自然に高まる Elem の環境の中で行うこと」が大前提であり、絶対条件でした。

しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で Elem での活動ができませんでした。そこで、来られないなら出向くという考えに立ち、学校用のプログラムを急遽作成し、小規模校から始め、中規模校、そして大規模校まで6回、学校に出向き実施しました。「生活費設計」だけに特化した活動内容にしたことで、生徒が Elem で行うものに近い活動内容になっていました。感想を見ても、生徒たちが今の自分の生活を見直すきっかけになっていました。それでも、Elem で活動する時に味わう独特の「ドキドキ感」「緊張感」が少なくなったのは否めません。緊張し、リラックスし、計算し、意思決定し生活設計を仕上げ、支払うときの緊張感、やり切った満足感・達成感、そこから自然に出てくる親への感謝、大人社会への憧れ、そして、今自分は何をしなければならないかという思い、この一連の気持ちの動きには及ぶことが出来ない、これが今年の感想です。

Elem での活動は、プログラム自体が全15時間でデザインされており、事前学習で習得した知識を実際に活用し、お金と自分に関わる様々な選択を行います。ファイナンス・パークは、学んだことを単なる知識の集積として終わるのではなく、その知識を自分のものとして「実際に使えるよう」「自ら考え・意思決定し・行動に移す場」として提供されます。このような問題解決能力を育む場を提供する目的は、生涯にわたり賢い生活者としての意思決定ができるよう、その素地を培うことにあります。そのように設計された Elem での活動に比べると、学校で実施した活動がどこまで生徒たちの心に沁みたくという点では疑問が残りますが、来年度、生徒たちが、本気で考え、悩み、決定し、そして、最後のあの達成感と虚脱感を合わせた素晴らしい表情が早く見られることを楽しみにしております。

## 視点 B Base「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善

### 授業力向上講座Ⅰ・Ⅱ 小学校社会科

Ⅰ：総合教育センター 橋本 雄一

Ⅱ：いわき市立中央台南小学校 戸田 秀樹 先生

### 教育研究発表会から

#### 1 研修のねらい

講座Ⅰ（基礎）では「新しい学習指導要領により社会科はどのように変わるのか」「社会科の授業づくりのポイント」などの基本的事項について学ぶことを目的に行いました。講座Ⅱ（実践）では、日頃の授業実践の紹介を通して、「『主体的・対話的で深い学び』を意識した授業とは、どのようなものか」を考えることを目的に行いました。

#### 2 研修の実践

講座Ⅰの協議では、第4学年の「県の学習」に注目し、どのような地域教材が考えられるかを話し合いました。「県内の特色あるまちづくり」の単元では、会津若松市・白河市（地場産業）、喜多方市・檜枝岐村（自然・文化の保護や活用）、郡山市・川俣町（国際交流）などが地域教材として教材化できるのではないかと、意見交流が活発に行われました。講座Ⅱの講義・演習では、「郷土資料集いわき市（デジタル版）」、「定着確認シート・活用力育成シート」などの活用方法や、小教研授業公開協力校での研究を通して作られた「社会科授業スタンダード」など、社会科の授業にすぐに役立つ様々なツールや指導法を数多く学ぶことができました。実際に模擬授業を通して、いくつかの問題に取り組みながら、先生方が子どもの立場に立って、学びを深めている様子が見られました。



#### 3 受講者の感想

「福島県をあまり知らなかったということを認識できた」「評価のポイントや単元のどの場面でどのような子どもの姿を見取るのか、勉強になった」「資料の活用の仕方、子どもたちを引きつけるための授業形態の在り方を学んだ」などの感想が寄せられました。

地域の教材化は大変ですが、ぜひ力を合わせて教材を作り、授業に臨んでほしいと思います。そのように頑張っている先生方の思いに、きっと子どもたちは応えてくれると思います。

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、本研究発表会が中止となりましたが、市内外を合わせ、200名を超す申し込みがありました。誠にありがとうございました。当日は、調査研究委員による1年次の研究経過報告と国土舘大学教授、澤井陽介先生の講演を予定していました。

調査研究委員の今年度の研究概要ですが、教科部会では、重点課題を「資質・能力を育成するための『主体的・対話的で深い学び』の視点による授業改善の推進」とし、単元で育む資質・能力を明確にし、単元のまとまりの中で「主体的・対話的で深い学び」の授業を構想・実践するために、「単元構想シート」を作成しました。教科外部会では、本市の生徒指導及び特別支援教育の現状から研究テーマを「子どもの困りに寄り添うチーム支援を行うためのケース会議の在り方」と設定し、研究実践を続けてきました。ケース会議を行う前に留意点を確認することや、6つの手順でケース会議を進めることで、児童生徒にとってよりよい支援策を考えることができました。道徳部会では、答えが1つではない道徳的な課題について、一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」を実践してきました。

澤井先生による講演は、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善」という演題のもと、以下の3つの視点からのお話をいただく予定でした。

①資質・能力に着目して単元をつくる

②主体的・対話的で深い学びを目指す

③学習評価から授業を考える

どの内容も授業をつくる上で大切にしていかなければならない視点です。

澤井先生のご厚意で、講演会での資料を活用することができます。資料はKドライブ「教育研究発表会」にあります。校内での研修等には是非ご活用ください。また、調査研究委員による今年度の研究経過資料と単元構想シート、授業実践動画の閲覧も可能です。詳しくは令和3年1月8日付、2教セ号外でご確認ください。



## 視点 B Base 教職員のライフ・ステージにおける研修の充実

### ミドルリーダー養成研修から (カリマネ・組織マネ)

#### ＜研修の趣旨と実際＞

本研修は、「ミドルリーダーとして果たすべき指導的役割を再認識し、教職員の資質向上を図る」ことを目的として、本市教育委員会独自の基本研修の一つとして位置づけ、実施しています。

5月の全体研修は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となりましたが、今年度は「カリキュラム・マネジメント講座」と「学校組織マネジメント講座」を悉皆研修として実施しました。両講座とも、ミドルリーダーの立場として、学校経営・運営ビジョンを見つめ、自校の課題解決に向けてマネジメントを意識して取り組むことができるよう、演習を交えながら研修を行いました。

8月のカリキュラム・マネジメント講座では、講師に郡山市立白岩小学校長の坂本義仁様をお招きし、カリキュラム・マネジメントの目的

や方法・手順などの理論と、カリキュラム・マネジメントカレンダーなどを活用し、自校化を図ることのできる方策を学びました。

9月の学校組織マネジメント講座では、「効果的な学校経営参画の進め方」として実践的な講座内容で進めました。演習で行った「マシュマロチャレンジ」は乾燥パスタ、ひも、マシュマロ1つを使い、制限時間の中で自立可能なタワー



を立てることを共通の目的としたチームワークやコミュニケーションが必要とされる活動です。

研修者からは、「チームの力が発揮できるような自分の働きかけを考えて、積極的に関わっていきたい」「『学校全体』という視点を持ち、学校運営に関わっていく姿勢をもたなければと痛感した研修であった」といった学校課題改善に向けた感想が見られました。

### 教頭実務研修②に参加して 川部中学校 教頭 嶋森 裕二

#### 1 研修のねらい

管理職としての職務を理解し、学校教育全般に対する具体的な方策をもって教職員をリードする力量を身に付ける。

#### 2 研修の実際

「教職員の資質・能力の向上とメンタルヘルス」の講義では、学校教育課 菅家管理主事より本市の方向性と今後の取組みについて講義がありました。具体的には「みらいをつくる いわきのABCプラン」の中で求められる教職員の資質・能力、子どもたちが10年、20年後の社会に出たときのことを踏まえた学校経営・運営ビジョンの策定、不祥事の防止を中心に講義がありました。管理職として職員室内だけではなく、学校全体を見渡す視野を持ち、教職員の資質・能力の向上、学校経営・運営ビジョンの具現化、不祥事防止等に取り組んでいかなければならないと強く実感することができました。

その後の「学校安全における防災体制・防災管理」の講義では、福島大学 天野和彦特任教授より「人を紡ぐ・いのちを紡ぐーみんなでつくる災害に強い地域づくりー」のテーマで講義がありました。平成23年の東日本大震災で経験したように、災害はいつ・どこで・どんな規模で起きるか分かりません。そのために、災害に対する備えが必要になってきます。講義の中でもありましたが、学校保健安全法で、学校において「危機管理マニュアル」の作成が義務づけられただけではなく、学校現場を十分に確認して不備がないかを点検し、実効性を伴った対策がとれるよう定期的に見直しが求められています。このことを管理職として強く心に留めて日々の見回り等を確実に行之、実効性のある災害対策を実施していかなければならないと強く感じました。また、自治体との十分な連携や、保護者・地域への周知、マニュアルに基づいた訓練など、学校としての取組みがとても大切になってくるので、地域連携担当教員と共に、地域と学校が協働して災害へ取り組んでいけるよう、尽力していきたいと感じました。

## 視点 C

# Care 児童生徒理解と対応の充実①

## チャレンジホームの活動から

チャレンジホームは、「人や自然との関わりを持つための体験活動を行うことで、コミュニケーション能力を育成する」という方針のもと体験活動を行っています。

### 1 体験活動を通して

今年度も、野外炊飯や職場体験をはじめ多くの体験活動を行いました。アリオスの演劇ワークショップでは、音響や照明の係に責任をもって取り組み、よりよい作品づくりのために演出のアイデアを出し合いました。そして、ソーシャルスキルトレーニングにおいては、リラクゼーション技法を取り入れ、気持ちや体調の安定を図る時間を設けました。また、アクアマリンふくしまでの職場体験では、魚への給餌と水槽の掃除を丁寧に、そして真剣に行う姿が見られ、感想からは、将来の目標や勤労観について考えることができた様子が伺えました。

通級する児童生徒の中には、自己肯定感が低い子どもも少なくありません。そこで、それぞれの体験活動ではねらいを明確にし、内省を通して自分を大切にしようとする気持ちを持たせたり、仲間と協力し達成感や成功体験を感じられる活動内容になるよう工夫したりしています。また、チャレンジホームの指導員や本センターのカウンセラーも同行し、子どもたちが円滑に活動できるよう支援を行っています。

### 2 アクアマリンふくしま職場体験の感想

- ・ 職場体験を通してとても心に残ったことは「好きなことを仕事にして生きていく」ということです。アクアマリンふくしまの方のこの言葉を意識して将来のことを考えていこうと思いました。
- ・ 自分も就職するなら、得意分野などを少しでも活かせる場所がいいなと思いました。
- ・ 職場体験をして、いつもたくさんの仕事をしているのだなと思いました。将来の仕事に役立てていきたいと思います。
- ・ 水族館で元気に泳いでいる魚や可愛い動物を見ることができるのは、働いてくださるみなさんのおかげだなと思いました。

## 特別支援学級等教育講座から

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、汐見が丘小学校の知的障がい特別支援学級担任である矢部寿基先生の授業を事前にビデオ撮影し、その動画をもとに授業研究を行いました。授業研究は次の2つの内容と手順で協議を行いました。

### 【協議1：授業の良い点と改善点の検討】

- ① 授業者からの説明  
(学級や児童の実態、授業の目標 等)
- ② 授業動画の視聴  
(良かった点と改善点を付箋に記録する。)
- ③ グループでの協議  
(良かった点と改善点を出し合う。)

### 【協議2：児童への支援の検討】

- ① 授業者からの説明  
(対象児の実態 等)
- ② 対象児の動画の視聴  
(対象児の言動等から言動の要因を推測し、対応策を考える。)
- ③ グループでの協議  
(対象児の言動の要因、対応策を出し合う。)

受講者から次のような感想が寄せられました。

- 小・中学校の先生方から見取りや考えを聞き、参考になった。また、特別支援学級では別々の学年の児童が同じ場でそれぞれに合った学習をしていることを初めて知った。(幼稚園教諭)
  - 児童の行動を様々な視点から分析していくことと映像を繰り返し見ることで、児童への見方が深まった。(小学校教諭)
  - 児童の行動について、他の先生方の読み解き方を知り、改めて視野が広がった。児童のことで悩んだ時には周りの先生方に見ていただき、視野を広げて支援をしていきたい。(小学校教諭)
- 動画による研修の成果として、
- ① コロナ禍にあって、動画による授業研究が有効な研修手段であること
  - ② 多くの教員が授業の動画を何度も見ることで児童の言動を細かく見取り、児童の言動の要因を深く探り、支援策を考えられること
  - ③ 授業を参観しての授業研究と同様に教員が授業を振り返り、授業の充実につながることがありました。

## 視点 C

# Care 児童生徒理解と対応の充実②

### 発達障がい教育講座から

発達障がい教育講座では、「発達障がいの可能性のある児童生徒の困り感を理解し、どのように支援すればよいか、考えを深めること」を目的に研修を行いました。講義等の一部を紹介します。

#### 【講義：通常学級における特別支援教育の進め方】

東京学芸大学名誉教授の上野一彦先生にご講義いただきました。特別支援教育に関する世界の動向や今後の展望、発達障がいの特性や具体的な支援法について、次のようなお話がありました。

- 障がいとは理解と支援を必要とする個性である
- 環境によって障がいの軽重は変化する
- Learning Diversity（学び方の多様性）等

研修者参加者からは、「長年の経験からの話は胸に刺さるものがあった」「学びづらさを抱えている児童生徒が自信をもって生きていけるよう、学校生活での支援を改めて考えていきたい」等の感想がありました。

#### 【演習：捉え方の違いに気づく】

- ①白紙に聞き取った指示（下記）通りに絵を描く。
  - ・紙の右上の隅から左下の方に向けて、流れ星が一つ落ちてきました。
  - ・その星の下に一軒の家が建っています。
  - ・その家の前には大きい池があって、アヒルが泳いでいます。
  - ・家の近くには犬小屋があり中に犬がいます。
  - ・空には月が見えています。



- ②ペアで描いた絵を見せ合う。（感想交流）

描いた絵を見ると、同じ指示でも一人ひとり捉え方が違うことや曖昧な口頭指示だけでは理解が難しいことが分かります。

#### 【その他、感想】

- 演習を通し、児童生徒の困り感を理解できた。
- 問題行動の裏にある、そうせざるを得ない子どもの行動の背景をよく考えたい。
- 個別的教育支援計画・指導計画に活かしたい。  
「障がいの有無にかかわらず、多様性を認め合える、あたたかいインクルーシブの輪をいっきにも広めていきたい」そのように感じさせられた一日研修でした。

### カウンセリング基礎講座から

カウンセリングの基本的な知識・技能の習得を通して、児童生徒理解や望ましい対応等についての研修を深め、より一層の指導力の向上を図ることをねらいとして本研修を実施しました。

#### 学校現場で使えるカウンセリングの方法と実践

講師：市心のアドバイザー 久保尊洋先生



MI（動機づけ面接法）について教えていただきました。両価性（学校に行きたいけれどやはり行きたくないのよ

うな二つの相反する気持ち）を話し手自身に気付かせ、行動を変容させていくことを目指す手法です。聞き手と話し手がレスリングのように対決するのではなく、ダンスをするように共感しながらカウンセリングを進めます。参加者は、オープンクエスチョンや是認・聞き返し・要約などのスキルを意識しながら演習に取り組みました。

#### いじめにおける心理理解と対応 ～いじめを生まない学級づくり・授業づくり～ 講師：立正大学特任教授 鹿嶋真弓先生

「教師という生き方」や「問いを創る授業」などの著書でも知られる鹿嶋先生をお招きし、いじめを予防するための教師の役割についてご講義いただきました。



互いに認め合い高め合う学級・授業づくりのために、

- ①個々や集団の緊張を下げる
- ②他者に興味をもつ
- ③互いに「すごい」と思える関係をつくる
- ④子ども主体の授業の構築

（自ら創った問いを探究していく）

という視点で、事例や演習を通して学びました。

#### 【感想】

- 考えや悩みなどの引き出し方が分かった。
- 改めて、教師は子どもの鑑だと思った。自分の声かけ・行動はどうだったか、これからどう接していけばよいかを考え直すきっかけとなった。

# ひろば 令和3年度 総合教育センターの取組み

## 研修調査室の重点

令和元年度に、教職員の働き方改革に合わせて研修内容等の見直しを図り、令和2年度から新たな研修体系で研修をスタートしました。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、4～5月の研修が中止や縮小となるなど、予定どおりに研修を進めることができませんでした。

6月以降も日程や会場、研修方法の変更など、コロナ禍の中での研修となりました。当初は研修にとって負の影響と思っていましたが、研修の必要性とともに、改めて研修方法や研修内容を見直すよい機会となりました。

令和3年度の研修は、新たな研修体系での2年目となり、基本的には令和2年度の内容で進めて参ります。その概要は次のとおりです。

### (1) 初任者研修の充実

教員の大量退職時代となり、本市においても多くの新採用教職員が配置されています。教職経験の有無等、初任者の状況には違いがあり、その違いに応じて研修が進められるよう工夫していきます。

### (2) 授業改善に向けた研修の充実

「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が進められるよう、基本研修の授業研修及び専門研修の教科研修を中心に、研修の充実を図ります。

### (3) 教育課題の改善に向けた研修の充実

カリキュラム・マネジメントや小学校における外国語教育、不登校対策など学校が抱える課題について、それぞれの課題改善に向けた研修・講座を職能研修や専門研修に位置づけ、研修の充実を図ります。特に、1人1台端末時代に対応できるように、情報教育に関する研修の充実を図ります。

### (4) 調査研究委員会の活動の充実

令和3年度は第7期の最終年（2年目）となるため、今年度の成果と課題を踏まえて、さらに実践研究の質の向上に努めます。

### (5) 大学等の外部講師による研修

より専門的な知見を得るため県内外の大学等の講師を招聘し、研修の質の向上に努めます。

## 教育支援室の重点

教育支援室では、これまで同様、いじめ・不登校などの困難な状況を抱える児童生徒への支援、障がいのある児童生徒一人一人のニーズを踏まえた支援の充実に向けて取り組んできました。

その中でも今年度は特に、特別支援学級や通級指導教室（以下、特別支援学級等）を初めて担当された先生方を支援する体制づくりの強化を重点事項として捉え、「特別支援学級等新任担当教員研修」の充実と「特別支援学級等新任担当教員サポート訪問」の実施を計画しました。

特別支援学級等を初めて担当される先生方は、「児童生徒とどう関わればいいのか？」「実態や学年が多岐にわたる児童生徒に対してどのように授業を行えばいいのか？」「自立活動って何をやればいいのか？」

など、多くの悩みを抱えたまま新年度をスタートさせていると思います。さらに、自校の特別支援学級が単学級の場合など、相談できる相手も少なく、悩みが解決されないまま時間が進み、さらに悩みが深まるケースもあるかと思っています。そのような先生方が、できるだけ早期から、教育支援室の指導主事と顔が分かる関係を作ること、悩みや課題を抱えたときに相談しやすいつながりを作ることが大きな目的です。

残念ながら、第1回研修会は、コロナ禍による緊急事態宣言中であつたため、計画通りには実施できませんでした。サポート訪問は多くの学校から申請があり、対応させていただきました。利用された先生方からは、

「不安な気持ちを話すことができる仕組みは必要であると感じた。」

「次の指導や支援に生かす情報を得ることができた。」などの感想をいただきました。

教育支援室では、これからも、新任担当教員のサポートの充実に取り組むとともに、多くの先生方が悩みや課題を抱えたときに、相談しやすい関係づくりに努め、しっかりと支える仕組みを充実させていきたいと考えています。

まずはお電話一本、気軽にご相談ください。